

少年美しき塔

海野順風

幾重にも打重なる山脈に包まれた、里深い山の中の出来事であつた。

溪谷を控へて聳りたつ山腹の森の樹が、突然に一本二本と伐倒され始めた。山に住む人々が、何事が起つたのかと、愕いて眼を見張る頃には、もうその森の大木は數十本伐倒されて、森の中には幾つも掛小屋が出来、見慣れぬ大工や人足が忙しさに働いてゐた。そして伐倒された大木は、見る／＼其場で柱や破目板に削られ始めた。

何事が始まつたのかと、初めはたゞ變つた様子に

愕いてゐた山の人達も、やがて、掛小屋の周圍に何處からともなく搬込まれた石や瓦が數多く積まれるやうになると、

「崖の縁の森の中で普請が始まるやうだな。」

「うん。珍しい事だ。昨日も素晴らしい石が搬込まれたやうだよ。」

こんな事を珍らしさうに噂しあつた。山に住む人達は、木挽や、炭焼や獵師などを仕事としてゐる人々で、今まで他國の人ともあまり往來もしなかつたから、昔のまゝの平和な自分達のみ山の山の中に、突

然に思ひもつかない大きな普請の始まつた事は、全く珍らしい事であつたと同時に、平和な山の中へ、他國の者が入込んで来て普請などを始めたと思ふと、自分達の領分を他人に奪はれるやうな氣がして、多少腹立たしくもあつた。

森の中の普請場では、山の人達のそんな噂などには頓着なく、毎日大勢の大工や人足が忙しく立働いて、とんかん、とんかん、といふ景氣のいゝ鏝や金槌の音が、秋の山の静かな空氣を衝いて、森から森へ響となつて響いてゐた。

この譯の解らない普請が、心よく思はない山の人達の中でも一番癪に觸つたのは岩松であつた。

岩松は、數年前に死んだ山番の子の、今では獨りぼつちの山の少年であつた。たつた一人の身寄であつた父親が死んでしまつた今では、獨りぼつちの身の上も別に淋しくも思はないで、父親の殘して行つた山番小舎に住んでゐたが、山の人達も別段岩松の世話をもしてくれない代りに、岩松が何をしやうと、

やはり咎め立てもしなかつた。だから岩松は全く獨りぼつちの代りに、全く自由な少年であつた。かうして山の中に獨りで育つ岩松は、獸のやうに自由に頑ましくどん／＼育つて行つた。

岩松の一番の樂しみは、森の中で木の實を摘んで食べたり、小鳥を捕つたり、氣儘に晝寢をしたりする事だつた。その一番樂しい場所であつた森の中に突然に大勢の他國の人達が勝手に入つて来て勝手に樹を伐つたり普請を始めたりしたのだから、岩松の樂しみは根こそぎ奪はれてしまつた。

岩松の癪に觸るのも無理はなかつた。

岩松は無性に腹を立て、しまつて、心から森の中に始まつた普請が憎くなつた。

やがて、その普請場には、大工や石屋の中に立つて指揮をしてゐる様子の、都の人らしい紳士の姿が時々見えた。山の人達はその若い紳士が普請場の主人だらうと噂しあつた。

岩松はやがてその紳士を強く憎みだした。

或る日、岩松はその紳士を谿川の邊で見いだした。

ふわりとした洋服見たいなものを着た紳

士は、その時、谿川の美しい水に

映つた眞白な雲の姿をぢ

つと瞞めてゐる様子であ

つた。

岩松は矢庭に紳士

に對つて後から石を投付

けた。

突然に水音を立て、谿川に落込んだ石に驚いて、

紳士が後ろを振り返つた時、堪らなくなつた岩松は大

木の蔭から眞赤な顔をして飛出した。

「あ、君だつたの？」と、岩松の姿を見て驚愕が消

えたらしく、紳士は穩かな顔をして岩松を見上げた。

「やあ、君は跣足だね。活潑なものだねえ。」

落着いた紳士の様子に、拍子抜けがした岩松は、

それでも、眼を怒らして紳士を睨みつけてゐた。

「君どうしたの？ そんな處に突立つて。さあこゝ

へ來給へ、何か俺と話をしやうぢや

ないか。」



紳士は重ねて岩松に言葉を掛けた。

「お前、あの森をなぜ伐つただ？」

やうやく岩松は、ぶつきらぼうに口を開いた。

「あゝ、あれかい。俺はあそこへ一つ塔を造らうと

思つてな、美しい塔を。」

「塔つて何だ？」

山の少年岩松は塔といふものを知らなかつた。紳

士は非常に愕いた様子だつたが、やがて、微笑した。

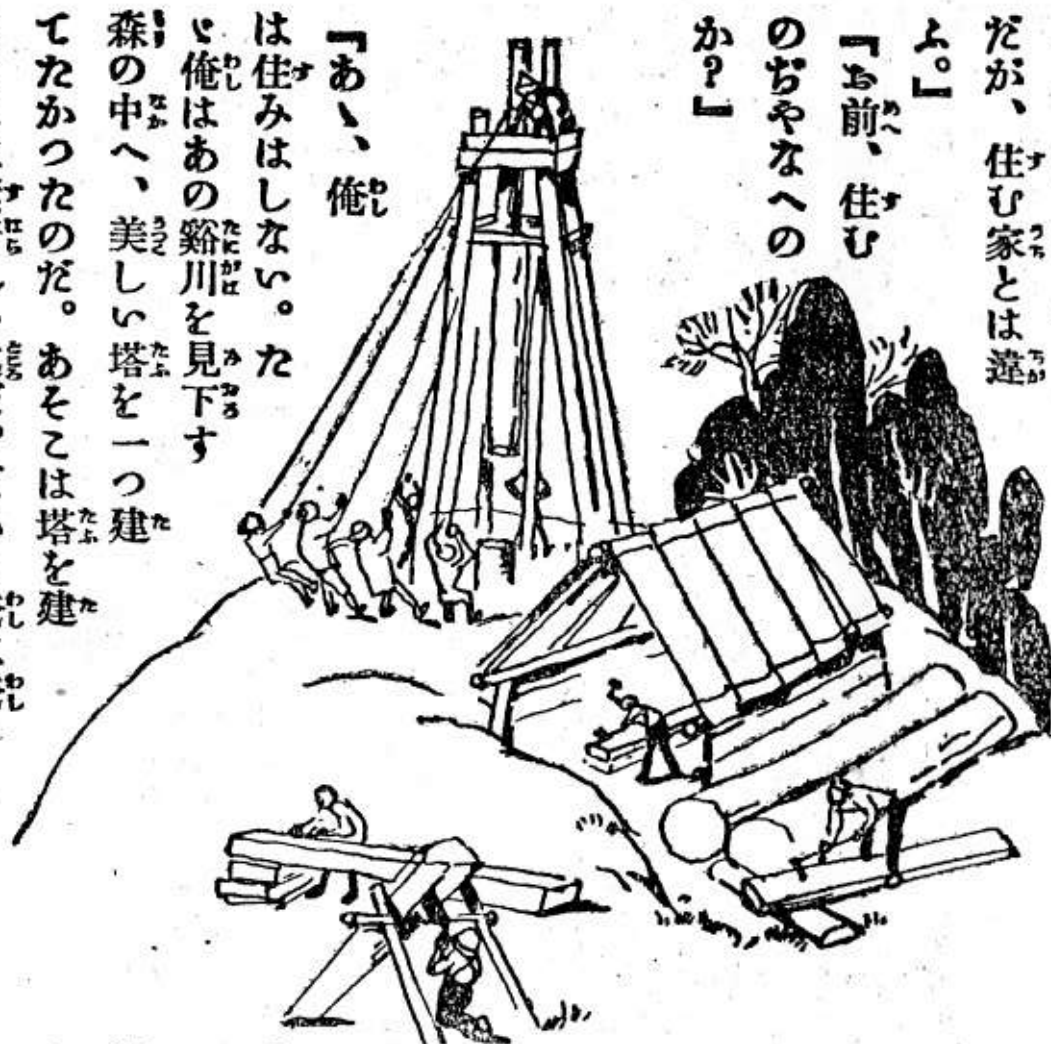
微笑しながら紳士は石の上に突立つてゐる岩松に、

順々と塔といふものゝ話をして聞かした。

「さうか。塔つて……なんだな。やつぱり家だな。」
と、聞終つた岩松はまた亂暴に問返した。

「さうだ。家見たいなもの
だが、住む家とは違
よ。」

「お前、住む
のぢやなへ
か？」



「あ、俺
は住みはしない。た
い俺はあの谿川を見下す
森の中へ、美しい塔を一つ建
てたかつたのだ。あそこは塔を建
てるには素晴らしい處だ。だから俺は俺

の思ひのまゝの美しい塔を建てるのだ。あそこへ美
しい塔が一つ建ちさへすれば、俺はそれで充分なの
だ。俺はそこへ住まうといふのぢやあない。然し、
俺のこんな考へは君には解るまいな？」

「解んなへ。」

岩松は即座に應へた。そしてまぢくと紳士の顔
を見下した。紳士の顔にはまだ思ひやりの深さうな
圓滿な微笑が浮んでゐた。岩松の日頃の憎しみの心
はおい／＼に消へかゝつて行つた。

紳士はまた語りだした。

「俺は今まで海に居た。」

「海つてなんだ？」

「あ、さうか、成程君はまだ海も知るまいな。」と、
また紳士は詳しく海の話をして聞かせた。紳士の親
切な口から語られる、まだ夢にも見た事がない不思
議な海の話、思はず岩松は聽惚れた。岩松はいつ
か、紳士の前に腰を下して、夢にも知らなかつた美
しい世界の話に熱心な耳を傾けてゐた。

「その美しい海に浮べるために、俺は美しい船を造つて浮べた。そして俺はその海の上に永く住んだ。

で、今度はこの美しい山の中へ美しい塔を作りたくなつたのだ。」と、紳士は長い話を切つた。

静かな二人の耳許には、その美しい塔を作る森の中の普請場の普請の音が、とんかん、とんかん、と聞えて来た。岩松の怒りも憎しみも、何時か拭つたやうに消失せて、岩松は却つてこの不思議な紳士が好きになつてゐた。

「俺も海が見たくなつた。」突然に、思ひ餘つたやうに岩松が口を開いた。

「さうか。」と、紳士は微笑して、「見たかつたら、俺が見せてあげてもいい。丁度、俺は君のやうな少年を一人下僕に欲しいと思つてゐたが、君は俺の下僕になつてはくれまいか？」

「俺何にでもなるが、下僕たどんなものだ？」と、岩松は正直な眼を見張つた。快活に笑つた紳士は岩松の爲めに重ねて下僕といふものに就いて説明かせねばならなかつた。

「さうか、そんなものか。よし俺お前の下僕になるだ。そして海へ連れてつて呉れるな。」



「俺何にでもなるが、下僕たどんなものだ？」と、岩松は正直な眼を見張つた。快活に笑つた紳士は岩松の爲めに重ねて下僕といふものに就いて説明かせねばならなかつた。

「さうか、そんなものか。よし俺お前の下僕になるだ。そして海へ連れてつて呉れるな。」

「俺も海が見たくなつた。」突然に、思ひ餘つたやうに岩松が口を開いた。

「俺何にでもなるが、下僕たどんなものだ？」と、岩松は正直な眼を見張つた。快活に笑つた紳士は岩松の爲めに重ねて下僕といふものに就いて説明かせねばならなかつた。

「さうか、そんなものか。よし俺お前の下僕になるだ。そして海へ連れてつて呉れるな。」

「俺も海が見たくなつた。」突然に、思ひ餘つたやうに岩松が口を開いた。

「俺何にでもなるが、下僕たどんなものだ？」と、岩松は正直な眼を見張つた。快活に笑つた紳士は岩松の爲めに重ねて下僕といふものに就いて説明かせねばならなかつた。

「さうか、そんなものか。よし俺お前の下僕になるだ。そして海へ連れてつて呉れるな。」

「俺も海が見たくなつた。」突然に、思ひ餘つたやうに岩松が口を開いた。

「俺何にでもなるが、下僕たどんなものだ？」と、岩松は正直な眼を見張つた。快活に笑つた紳士は岩松の爲めに重ねて下僕といふものに就いて説明かせねばならなかつた。

「さうか、そんなものか。よし俺お前の下僕になるだ。そして海へ連れてつて呉れるな。」

「俺も海が見たくなつた。」突然に、思ひ餘つたやうに岩松が口を開いた。

「俺何にでもなるが、下僕たどんなものだ？」と、岩松は正直な眼を見張つた。快活に笑つた紳士は岩松の爲めに重ねて下僕といふものに就いて説明かせねばならなかつた。

「さうか、そんなものか。よし俺お前の下僕になるだ。そして海へ連れてつて呉れるな。」

「俺も海が見たくなつた。」突然に、思ひ餘つたやうに岩松が口を開いた。

「俺何にでもなるが、下僕たどんなものだ？」と、岩松は正直な眼を見張つた。快活に笑つた紳士は岩松の爲めに重ねて下僕といふものに就いて説明かせねばならなかつた。

「うむ。あの塔が出来上つたら、君を連れて俺はまた海へ行かう。」

岩松は躍上つて喜んだ。

其日から岩松は、神様に仕へる小羊のやうに素直な、紳士の下僕になつた。

翌日から、森の中の普請場には一心不乱に働く岩松の頑ましい姿が見られた。

やがて、若い不思議な紳士の建てた塔は、谿谷を控へて山腹の森の中に美しく落成した。その塔は、お宮やお寺にある古風な塔でもなく、さりとして外國の繪にあるやうな塔でも勿論なかつた。今まで塔と名のついた種々の建築物とは全然變つた、もつと品のいいもつといふ形の、本當に美しい塔であつた。流石に、今まで一種變な心持を持つてこの塔の普請を見てゐた山の人達も、出来上つて森の中に聳える塔の美しさには、誰しも讚嘆の眼を放たずには居られなかつた。

が、美しく出来上つた塔には一つの不思議が残つ

た。それは、美しい塔が落成すると等しく、今まで森の中で働いた數十人の人々の姿は忽ちに搔消すやうに、何處かへ行つてしまつたが、それと同時に、塔を建てた紳士の姿も山の少年岩松の姿も、同じく消失せるやうに見えなくなつてしまつた。

つまり、山の人達の考へでは、新しく出来た家に當然住むべき人。それが何處かへ消失せてしまつたのだつた。

これには山の人達も不審の眉を顰めた。

幾日経つても、塔へ歸つて来る人影はなかつた。

「あの塔の天邊の部屋を覗いて見ろ、あの都の男と岩松の二人は死骸となつて横たはつてゐるぞ。」

やがて、こんな噂まで山の人達の中に傳はり出した。然し、誰一人それを見たといふ人もなかつた。

紳士と岩松の姿は更に現れて來なかつた。

たゞ美しい塔のみが、静かな山の流に沿ふ森の中に、いつまでも、朝日夕日に美しく輝やいてゐるばかりであつた。